

自然の歩み ～「沈黙の春」出版から60年に思うこと

ながれ

上遠 恵子 (かみとお けいこ / レイチェル・カーソン日本協会)

アメリカで1962年に海洋生物学者で作家でもあったレイチェル・カーソンが著した「沈黙の春」が出版されてから、60年の時が流れました。私たちはこの本によって農薬のような化学物質による環境汚染について初めて目をひらかされたのでした。春が来ても鳥も鳴かずミツバチの羽音も聞こえない沈黙した春を迎えることになるだろうという寓話に始まるこの本は、20世紀後半における最大の問題提起の書と言われ、いまだに版を重ねているロングセラーです。

「沈黙の春」は、アルベルト・シュヴァイツァーに捧げられています。シュヴァイツァーの言葉として“未来を見る目を失い、現実に先んずるすべを忘れた人間。その行き着く先は、自然の破壊だ”と記されています。

いま私は、「沈黙の春」を読み返しながら新型コロナウイルスのパンデミックに右往左往している人間のあり方について深く考えさせられています。

●地球は人間だけのものではない

地球は、たくさんの生き物たちが織りなすネットで覆われています。人間は、その網目の一つに過ぎないのに自分たちの利益のために自然を作り変えようとしてきました。熱帯雨林を切り開いて道を通し、牧場や農場を作りました。その結果、それまで住み分けていた生き物たちとの接触の機会が増えてきました。密林の奥深く、コウモリなどに住んでいた新型コロナウイルスは、新しい宿主を見つけて爆発的に増え地球規模のパンデミックとなってしまいました。私たちは、地球が人間だけのものではないことを思い知らされ

たのでした。

いまや私たちは、グレート・アクセラレーション（大加速）の時代になり、国際交流は盛んになり、瞬時にして世界中と繋がることができるようになりました。それは、素晴らしいことなのですが、私のように昭和一桁生まれの人間にとってはいささか馴染めないものもあります。

20数年前、その頃ベストセラーになった「奪われし未来」(Our Stolen Future)の著者の一人であるダイアン・ダマノスキーさんと話した時のことを思い出します。彼女は“人類を一つの種と考えた場合、グローバルゼーションは危険だ。これまで地球規模の気候変動などを人類が乗り越えてきたのは、たくさんの文化や文明が各地に散らばっていたからだ。地球の統合が進んでいくと世界に一つの文明しかないのと同じになる。そうすると生命を支えているシステムが崩れると全てがダメになる。バスケットに全ての卵を入れてしまうと、もし、バスケットを落してしまったり卵はすべて割れてしまうのと同じことになる。”と語っていたことが忘れられません。

いま、地球の温暖化、気候変動は待ったなしの危機的状況です。戦争などしている時間などないと思います。全世界が一致してこの問題に取り組まなければ、人間は生き残れないかもしれないのです。

●戦争は環境破壊の最たるもの

日々伝えられるウクライナ侵攻のニュースは、私の心を乱します。日本が敗戦を迎えた77年前に16歳だった私には戦場の映像と音は、東京が空襲された時の焼夷弾が落ちてく

るシュルシュルという音、焼ける匂いなどがフラッシュバックして辛くなります。

今はミサイルなど近代兵器になっているのでさらに危険だと思うとウクライナの人々の恐怖が伝わってきます。戦車に荒らされた畑、汚された川、破壊された歴史的な美しい建築物、何よりも人々の心、特に子どもたちに与えた心の傷はどれだけ深いものでしょうか。かつて60年前、ベトナム戦争でアメリカ軍が枯葉作戦と称して密林に撒き散らした枯葉剤（2,4,5-Tという除草剤）の影響でベトちゃん、ドクちゃんのような障害を持った子どもの救済が大きな話題になりましたが、60年経った現在でも、いまだにベトナムでは障害児が生まれているという事実は戦争がいかに残酷なものかを物語っています。（坂田雅子監督、ドキュメンタリー映画“花はどこへいった”、“沈黙の春を生きて”）。

1963年、癌に侵され既に死を悟っていたレイチェル・カーソンは枯葉作戦の計画を知り、その危険性を深く憂慮していたことを当時カーソンの助手をしていた女性から聞いたのは1999年のことでした。

●自然の安らぎ

この原稿を書いている梅雨明けの猛暑の朝、庭の小さな池からトンボが羽化しました。しばらく翅を乾かすように近くを飛び回り、やがて遠くへ飛んで行きました。シジュウカラも巣立ち自然界は生命に溢れています。戦争の暗いニュースに気落ちしていた心が少し元気になってきます。

「環境文明21」の事務所のある街に生まれる時から住んでいる私の記憶には、夏の夜のフクロウの声、六郷用水のホタルの群れ、竹林の湧き水にはサワガニがいて、という思い出がしっかりと刻み付けられています。今は、フクロウもホタルもいなく

なりましたが、五感を通して鮮やかに思い出せるのは、とても幸せです。子ども時代に自然の中で遊んだ記憶は、90年経っても鮮やかです。

いま都会の子どもは、泥んこになって遊ぶ自然もなく、コロナ禍もあって大声で叫ぶこともなかなかできませんが、私は子どもや若い人たちの感性に期待しています。子どもたちを自然の中に連れ出して、遊具もゲーム機もない森の中で遊ぶ“森の幼稚園”などが小さいながら全国に広がりつつあります。

自然の歩みはゆっくりしています。潮の満ち干、蛹の羽化、蕾の開花など時が来るまで待たなければなりません。子どもたちは、待つことを学ぶのです。

最近、映画やドラマの倍速視聴や、タイムパフォーマンス（タイパ）コストパフォーマンス（コスパ）という考え方が若者の間に流行っていると聞くと私の心は穏やかでなくなるのですが、どうか地球に住む生き物の一員として自然の歩みを自覚して欲しいと思うのです。

わたし事で申しわけないのですが、昨年11月に体調を崩しました。主として整形外科の分野ですが、次から次へと故障と痛みの連鎖で難儀しましたが、生き物としての人体が老化していくプロセスを実感いたしました。

“鳥のわたり、潮の満ち干、春を待つ固い蕾の中には、それ自体の美しさと同時に、象徴的な美と神秘がかくされています。自然がくりかえすリフレイン・・・夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ・・・の中には、かぎりなく私たちを癒してくれる何かがあるのです。”

レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」より